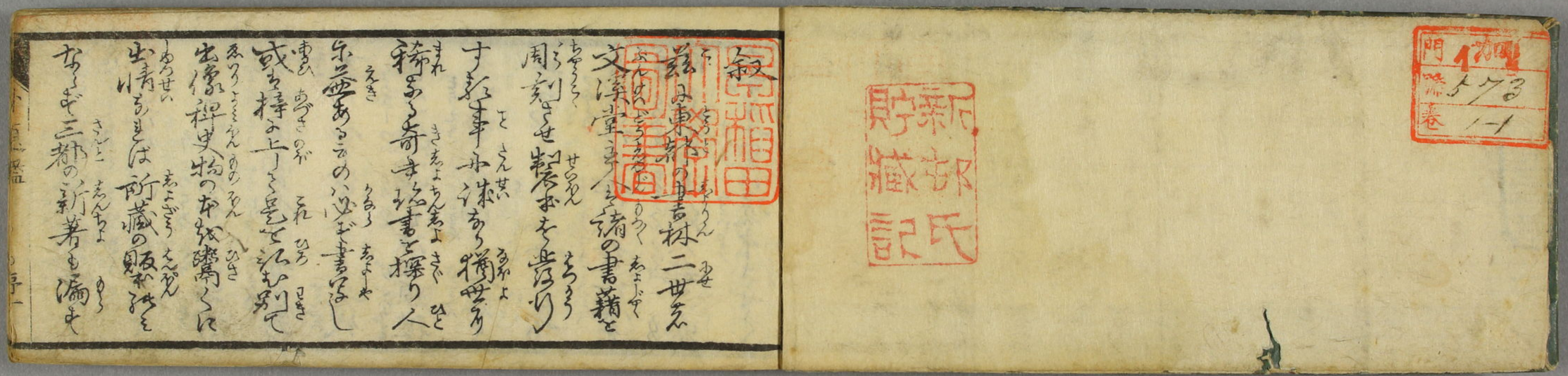
和漢奇談小説像記
雜部怪異
録史談
和装本
12
573
諸家雜事
出典考
小説集錄
外題
欠損
全



新潟市立図書館貯蔵
郡司氏蔵記
門 イ加 ム73
巻 一-一

叙

[illegible]林二世[illegible]
[illegible]の書籍を
文漢堂主人[illegible]
周刻せ製おを[illegible]
す[illegible]事ハ[illegible]
稀ふ奇[illegible]書を撰り人
[illegible]
或ハ持ち上り[illegible]
出像稗史物の本紙[illegible]に
出情[illegible]ば所蔵の[illegible]
なるぞ三都の新著も漏[illegible]

事すく拙くして多紙を傾むり
依て清閑の時いと序を信まて
せまほしき年来心を用ひて其
業跡同高の人こゝに有の益乃
書伝んこと欲うりゝ先代
の志を継で物の乏きの類猶
を博愛し最細なる再賜も
図たもぐく其差毎の意味
を要泥て稗史好の記憶を
助く此故に長編大部の物
の如き千里に懐中させく

衆人成樂すむ凡此小冊
を貯へ為て和漢の軍記
萬巻の雑書稗史常に座
右に有ども僕文漢共に
氏の丹心を感悦の余り拙
筆を補助加え校訂の
全部十方墳書の諸
君達書賈文漢共ゲ這
書を撰集する苦心者
の為に忠信を推奨て
永久貴殿の愛顧あらん

なまへ
于時天保九年戊戌
仲秋吉辰
東都　蓮池菴
教訓老人　鵜鶴貞高
猶此巻毋に漏れず遺かす
事年々なるべし　此後の新著も
追々補刻す　且後編
中形人情滑稽まで委く
志して出さんと願ふ
めでたし
撰者　文溪堂琴秀誌

譚仙中藩　合龍春張

○軍記の部

前太平記圖會　全六冊

人皇六十六代　醍醐帝延喜七年
より延徳院の治世まで二百四十余
年の間武将の子孫王経基をド
めて源の姓を賜ふを最初とし
源平両家の軍事奇談を
ちく記して画を加へたり

保元平治圖會　全十卷

七十七代　後白河院の御宇美
福門院の御作行状崇徳新院
の恨みをふせぎ天下大乱とな
の始末を記したるくーホこまを
ものがたりとして平家の勢ひ盛
となり頼朝公を伊豆の國に配
流まで記せり

源平盛衰記圖會　全六冊

二條院德保年中より安德帝の
壽永の頃まで凡そ二十余年
の間の事共を考へて記す

義經勲功圖會　前後　五冊

牛若丸と申せし時より兵法を学ばせ
給ひ鞍馬山に登り剣術を
あぐ後に鬼一法眼の軍法を
うけて一代の功名かくれなきは
まことに成ぬるとて画解とあせ
給へるなり

義仲勲功圖會　前後　十卷

木曾義仲は平家を討て源
家の嵯峨を絶らく大功実は
頼朝義經の功ばかりなれば其
いきほひ頼朝の奸心ありて其
盛衰短くして遂に頼朝の
威名高き一代の功を成たるなり

繪入鎌倉太平記　前後　十二卷

北条家執權職九代の間
の治乱興廢幷泰時の仁政高時
の暴悪をつらく記せり

星月夜顕晦録　當時燒板

頼朝公三代の間の君臣の得失
かねつらの事跡をつらぬ

繪本和田軍記　前後　十二冊

和田の義盛は鎌倉開立の功臣
その族九十三騎忠烈ふかき人多し
されど北條の悪逆制しがたく
英名をとどめるはかりなり武勇のたぐひ
をつらく画解とあせ

繪本曾我物語　全十冊

徳成時宗が敵討をつらぬ

鎌倉新語　初編五冊
星月夜と同じ

繪本平泉實記　前後十二卷
頼朝奥州征伐の事をとりたるなり

太平記圖會　初編八卷
人皇九十五代後醍醐天皇乃即位より九十九代後光嚴院の治世まで凡四十余年の間忠臣孝子の傳をも加へ軍記ぬしを本朝無双の名記なり

繪本楠公記　三編揃　三十卷
日本武略の第一智仁勇の名將楠正成の忠烈奇軍太平記ぬしをもくわしく記ぬしをもくわしくしていと物もろし

楠正行戰功圖會　前後十一冊
正成の男正行父の遺訓を守りて南朝の忠臣盡し軍畧奇兵をもつて足利勢をゆぶり戰功美談いと多き伝をもくわしく集録して圖繪を加へう

楠二代軍物語　全五冊
楠二代の繪解なり　袋入り價も下直なれば進物などにいとよし

繪本應仁記　初二三まで十五冊出来
足利將軍義政公政事の乱れとろへしより應仁の大乱義明將軍信長小天下を奪ひ

まで百余年の爭戰をあらん

浮戸　高井蘭山輯
　　溪齋英泉圖

拙見感應清正眞傳記　全六冊
名將の清正公の幼立より一代の武功を圖繪とせ

繪本甲越軍記　三編揃　三十六卷
甲越両國の智勇を競ふ古今無双の軍書あり

繪本菊地軍記　前後十冊
九州の名家菊地家の武功をあらはせり

大内多羅軍記　全六冊
周防山口の大内家の軍記あり

但一作五物語あり

太田道灌雄飛録　全六冊
一代の武功ならしめ繪入物ざうとせ

繪本南総里見軍記　全十卷
この書八里見氏の起原上野の國なる里見村の由来より説ひて絶代々の武功安房上総下総の三國に猛勇の旗をなびかす五十余箇城の大守と仰れ関東に美名高く仁を施し義をひけ忠臣孝子を招くの美談八州の名所古跡里見家にゆかりある事ども中興の元祖義實の德行ハいふも北条氏と爭ひ後年馬の埴の城の合戰虚実且ハ田原の

なめ小世秩ら五一小太藏の諸士と
あ大石ら力と力と義戰ろ人と大田
道灌の子孫太田源吾同源六の
勇力里見氏と合体して小田原
勢と打破るの功軍數代連綿とつ
於る事實を詳しく記すものあり

東陽齋主人輯錄

復仇 附 忠誠實錄の部

繪本忠臣藏　前後二十冊

四十七人の義士の傳と諸書より
あつめ詳しく物語あり

繪本雪鏡譚　全十二卷

加賀見山の實錄と國諸士の
美惡を考へ小記せ

繪本金花譚　全十二冊

頼兼ぬ一廓通ひ文治高尾のへ
をつめと政岡の忠義又小惡人
仁木彈正の奸智ホとアとくつで
て武門の用心とあるべきものあり

繪本靈驗記　全十冊

毛谷村六助仇討のものがたり

繪本伊賀越　全七冊
渡邊数馬唐木政左衛門の助太刀あるて沢井又五郎をとゝめ大勢の仇を討めぐりあ

忠孝美善録　前後十冊
伊賀越の後日ものがたり仇討こと

繪本二島英雄記　全十冊

繪本荒川仁勇傳　全十冊

同復仇孝勇譚　全八冊

同誠忠傳　全十冊

同則定仁勇傳　全八冊

同白石噺　全六冊

繪本金毘羅神靈記　全十冊
田宮坊太郎が金比羅の霊験を大歌を詩るめぐり

繪本淺草靈驗記　全十冊
世にいひたゝるる乙川の血なまめぐり

繪本箱根靈驗記　全六冊
世俗いぎりの仇討といひたゝる

繪本亀山話　全十冊
世あゝ石井明道士とも名ぼくち

繪本合邦辻　全十冊
加州高橋氏の後仇美談あり

茶店墨江草紙　全九冊
殿下茶屋の繪本あり

同會誓松の雪　全七冊

西國孝婦孝義録　全十冊
順礼

繪本雙忠録　全十冊

豪傑勲功録　全十冊

繪本顯勇録　全十冊

諸家新編　稗史之部

飛田匠物語　全六冊
六樹園大人著
葛飾北齋翁画

世の人口に傳りくる左甚五郎の故由故思ひ出せて番匠の奇巧人の命を救ひすゝ唐國の人と智巧くらべて勝まさる業と感せしめ其外大工の故実にいるまでくはしく記し或いむさゝの國竹芝の故事更科日記の文雅ゆゑ奇談をどすべて珍しきおもしろき綴らまさりこのよこと本ハ倭文とかゝらんかゝとも有べし

東嫩錦　全五冊
小枝繁著

こゝまゝ東の仇討ゆゑ多く実録ゆゑ作りまされがらつまのよこと

わんとハおもしろくて古風なそ人情とこまやかなれせり

双蝶々白糸草紙　全五冊　苟藥亭作

敵討松山話　全六冊　立川焉馬作

近江縣物話　全六冊　六樹園著

繪本妹背山　全六冊　振鷺亭作

田村物語　全六冊　川上老人作

千代能七変化物がたり　全五冊　振鷺亭作

俊德丸　全五冊　同作

月宵鄙物語　前後十冊　真顔大人作

桃久松山物語　全五冊　馬琴作

勢田橋龍女本地　全三冊　種彦作

忠孝連理片袖　全五冊　一九作

長柄長者寫塚　全六冊　鬼卵作

松王物語　全六冊　小枝繁作

催馬樂奇談　全六冊　同作

天橋立　全五冊　一九作

金花夕映　全五冊　谷峩作

自来也物語　前後十一卷　鬼武作

漂注その雪　全五冊　馬琴作

石言遺郷　曲亭主人作　全六冊

遠江の國佐夜の中山ふるとゝ云ふる夜泣石のことゝ云ふて菊川の里の奇談あんど長とふるりろき物ぐろ〻〻

柳の糸　小枝繁作　全五冊

新累解脱物語　馬琴作　全五冊

斯波遠説　七長臣　谷峨作　全六冊

窓蛍餘談　琴魚作　全六冊

小櫻姫　前編五巻　京傳作

小櫻姫　後編五巻　琴魚作

前後とも よく揃ふて れりろ〻

國字鶴物語　荀藥亭長根作　葛飾北齋画　全五巻

頼政鶴と退治して前のやまれ高くそのそ鶴によりて種々の奇談を新に説まてる因果物ぐろ

さすが小狂歌の大人とて戯作者の及ばぬ文章一家の雅風あ〻ぐらく

不視ゆる草紙あり惜いかな駁木焼失の後摺巻と者とまれる〻

菖蒲草櫓五月雨　文東陳人著編　全三冊

六波羅落と發端として作る物ぐろ此駁木も今ハあ〻

千代物語　前後十冊

百合若埜居鷹鳥　萬亭作　全五冊

世小諺百合若十日眠の物ぐろ

松風村雨物語　前後十卷　文東陳人作　歌川國直画　齋英泉画　全五冊

行平朝臣因幡の任より須磨乃浦なりしふの事跡古今にかもろくき奇談なり

嫩髻蛇物語　全亭主人作　齋英泉画　全五冊

金鈴橘草紙　全五冊　同作同画

風狸傳　柳亭種彦校　全五冊

忠孝顯名録　全六冊

放下僧物語　全四冊

車僧物語　全五冊

雙名傳　全五冊

花若丸一代記　全四冊

泉近衡物語　福地鬼外著　全五卷

一名小大嶋軍記ともいふその趣向一際別ぬけたり

繪本沉香亭　全十卷

新田義助沉香亭に今の奇談巻の首に奇術をたくみたる異説後ろに南朝合戰のなりむかしを記して常のよくこの本とかりて楽しべ

忠孝比玉傳　全六卷

古實今物語　全五冊

坂東忠義傳　全九冊

浮牡丹全傳　全四巻
山東京傳著　歌川豊國画
浮牡丹香爐の由来山路箱渡しめ危談名にしおう京傳先生妙作画
もすそ元祖豊國の筆ゆてよろこ本流行ゆえの製本ちの頃評判の草紙ゆりーゞ板木焼失して今い絶えり

巫山夢　全五冊
十返舎一九作
八文字屋風の洒落ぐてゆえ一流の口調ゆえ本ぐゝ例の滑稽を兼たり

初夢富士見曽我　全三冊
元祖　焉馬作

歌舞伎年代記　全
元祖　焉馬撰集

松井物語　全三冊
赤城山人作

日本水滸傳　全五巻
綾足大人著

八百屋於七　胡蝶夢　全五巻

明月清談　全五巻

復讐故郷錦　全五巻

鉢被姫物語　全五巻

出雲物語　全五巻

東雄操物語　全五巻

東雄過糸筋　全五巻

三嶋小女郎　麓の花　全五巻

復仇武藏鐙　全五巻

五人振袖　全六巻
白鳥奇縁　全六巻
河内国七嶋木綿　全五巻
薄雲奇譚　全五巻
幸物語　全六巻
白玉草紙　全六巻
新編熊坂物語　全五巻
謡曲春栄物語　全五巻
蟹猿奇談　全五巻
筒井清水　全六巻

在原草紙　全五巻
櫻木草紙　全五巻
鬼嬢傳　同
千貫樋　全六冊
小説江登紫　同
金鱗化粧櫻　全五巻
螢狩宇治紀聞　同
繪本美鳥林　同
會稽三浦譽　同
寄木草紙　前後十巻

響通筺	全七冊	
於陸奥幸助夢の浮橋	前後八冊	
平井権八妹背語	全五卷	
繪本打出濵	同	
繪本綴の錦	同	
逆櫓松	全六冊	
馬場若全傳	全五冊	
書替文章霧	全五冊	
那智の白糸	同	
奇談青葉笛	全六冊	
繪本伊吹物語	全五冊	
繪本遠山日記	同	
雲井物語	全五卷	
手引の糸	全六卷	
弥生櫻	同	
雙三味線	全五冊	
繪本檀二葉	全六冊	
駿河舞全傳	同	
繪本貧草紙	同	
金谷金五郎	全五冊	
王廻搓掛	同	

蝶の夢花之曙　全六冊

朝顔日記　前五冊　後五冊

駒沢治郎左衛門の傳てまぶへ〜異朝の小說翻案絵入ちゝ本中の冠とす芝屋司馬の遺稿を浪花の作者多柳浪大人の補ひ綴まし〜評判記絵本なり

室の八嶋　全八巻

怪猫の美人と化しる物語ふて東の作者の及ざる妙作なり

浪花俠夫傳　全六冊

男伊達のあらましを綴まし奇〜怪〜新奇珍說いと多〜

盆石皿山の記　全五巻

紅皿欠皿のこと紙あくまでもろく作らまさり　曲亭主人作

越路章　前後十二巻

山嵐山花月奇談　前後十冊

優雅言安達原　全六冊

峯乃ふぐま　全六巻

北野の霊驗　二葉梅　全六冊

孝子嫩物語　全五巻

石堂丸刈萱物語　全五冊

蜻蛉の巻　全六巻

若葉榮　全六冊

愛護の若　全五巻
嶋川大平　犬神物語　同
繪本口之碑　全四巻
我儘草紙　全五冊
玉照物語　同
堪談堤の菴　同
阿波の鳴戸　同
和漢の染分　同
繪本浪花男　同
繪本根笹雪　全六冊
檀風物語　全五巻
復仇尼城錦　同
西海浪間月　同
鳥邊山岩くゝの糸　同
竹乃伏見　全六冊
三山草紙　全五巻
復讐千丈松　同
大和物語　同
忠臣山賤傳　全六冊
琴松譚　同

文化新板 宗像暦 全七冊
浄瑠璃姫物語 同
芦茅草紙 全八冊
庚申談 全五冊
観音守護宝叙 同
鏡山烈女功 同
旭立帯 同
復讐親子塚 全六冊
松蔭草紙 全五卷
以呂波草紙 同

繪本松栄花 全六卷
同 夜船譚 同
同 茨の露 同
再開高臺梅 同
二枚繪草紙 同
淀屋形金鶏新話 前後十卷
女熊阪鹿校草紙 全五冊
雨夜傘 全十卷
都鄙物語 全五冊
繪本賢女鑑 同

發功譚　全六冊
名月夜話　同
春夏秋冬四季物語　前後十冊
竹鼠犬猫奇談太郎　全五卷
復仇二見浦　全十冊
同　越女傳　同
本朝悪狐傳　全十卷
梅川忠兵衛　赤縄奇縁　全十冊
女水滸傳　全六冊
二個土言傳内　笛摺　全五冊

小野八十島蔵　全十冊
繪本物草太郎　同
同　奇縁傳　同
同　石金譚　同
しく全傳籠月草　全六卷
道成寺鐘ノ記　同
長崎月桂新話　前後十二冊
世継草紙　前後十卷
四谷怪談　全五冊
梅菊新話　全六冊

野路の玉川　全九冊

名所百乃かちの深　全五冊

双蝶記　山東京傳著　全十卷

この草紙い山東京傳よこ本の作かさめあて古今元類の妙ぢゆう画も元祖豊國の筆ゆえ彫刻も高ちゆふ製本あくぶりのほし

白狐傳　玉山画作　全十冊

一名あやう一物語

近頃まるこのの名画作ゆえ東あくまる絵もあくぶる草紙あり

山桝太夫　全五卷

後編今調録　谷峩作　全六卷

月氷奇縁　全五冊　馬琴作

三七會傳南柯夢　曲亭馬琴作　葛飾北齋画　全六卷

筒井順照楠と切てとめとて木精の怪あり半七三勝の奇縁を説古今人情の意をつくし良まあおりろき物語なり

南柯後記　同作　同画　全八卷

南柯の夢の継作あく前編ふもまさる奇談といべし

繪本料草紙　本丁庵三馬著　全五冊

出ゆえ奇談とあめそめづらふみもろし

常夏草紙　馬琴作　全六冊

お夏清十郎のものがたり

文学上人行狀記　橋供養　小枝繁作　全五冊

古ゆえの盛遠ゆ袈裟の記あり

松深情史 秋七種 全六冊 馬琴作

お深久松の物がたり

刀筆青砥石文 全八冊 馬琴作

摸凌案のおもひさめ赤一種の奇談ろり

浅間嶽面影草紙 全三冊 柳亭種彦作

後編 執着譚 全五冊

種彦先生の新案奇代ぶり

阿古義物語 全五巻 三馬著

同 後編 全六巻 春水著

弁慶異傳 全五巻 英泉画

為永春水門人 柳魚作

こゝ春水の種あそびろし

梅花氷烈 山東京傳作 全四冊

後編 梅花春水 為永春水作 全四冊

前編發市の後数十年後編と継ぎて全傳ひとつ。実小氷烈春水の如く鮮和げろ小梅が愁の眉と開き看官これを由兵衛の物語とらべし

隅田川梅柳新書 曲亭馬琴作 全六冊

梅若松若の事跡で種とはすれども名にしゝ作者の新書まして岸の柳ホ梅が香てふ〳〵る筆の綾錦文章清きハ隅田川の景色もえゆる物語

歌計裏見葛葉 曲亭主人作 全五冊

三國一夜物語 曲亭主人作 全五冊

冨士と浅間の煙のごとく一夜乃中に板木の焼失今ハ販世に絶ろり

近世怪談 霜夜星 柳亭主人作 全五冊

世の人々の言傳ふ四谷怪談の繪入にて芝居ぶするも此本の著述よりぞもとづくなり

勧善常世物語 曲亭主人作 全五冊

最明寺殿雪の段の旨を法華

安積沼 山東京傳作 全五冊

小幡小平次の怪談なり

雲絶間雨夜月 曲亭馬琴作 全六冊

鳴神法師の物語なれども孝子の傳を加へてなりたるなり

安方忠義傳 山東京傳著 全六卷

将門の息女滝夜叉姫が芝仙の術に依て男士を招き父のこころざしを継んとするいきさつを物がたりなり

うぶんげ物語 山東京傳作 全六冊

雉 殺鳩 曲亭馬琴作 全五冊

右の本は前ハ千寿丸と相同じ両書とりふ作なれども人名の名人の作にてなりたり

鷲之談 山東京傳作 前後十卷

四天王 曲亭主人作 前後十卷

糸櫻春蝶奇縁 馬琴作 全八冊

旬殿實々記 曲亭主人作 前後十卷

蟬九半月夜話傳記 白頭子柳亭作 前後十卷

草紙に作りたれども前後相合して看に倦なし

松浦佐用姫石魂録　前後全本十二冊
曲亭主人作
瀬川采女才女於菊が傳　翻案
是てあり　ろさ　ゆう　多く

美濃　八丈奇談　全七冊
古衣　馬琴作
おとは才三の名をもちひてあくふ
説いぶん物がたりそもじあふ齋藤道
三の傳をあらハ一古今無類の奇
談なり

さくら姫　全五冊
山東京傳作
あまハ婦女子の耳にふれる清玄の
奇談をて一部の趣向古今あくふ
あるを妙作世小繪入ちゑ本流行
なるも此物語を第一とかぞへ一なり

忠臣水滸傳　前後十卷
山東菴著

忠臣藏を水滸傳の
ごとく其文章めづらふ一家の風
著りよろしかのかをとこいとんり

假名手本後日文章　全五卷
元祖　五川馬馬作
同　北斎老人画
忠臣藏の後日ゆく古今の妙作殊
に一流の筆意あり

忠孝潮來武志　右同作画　全五冊
いとこぶ　ぶ　唱秋　忠臣
孝子の物語馬馬老人一代の作とそ
を一

紙手摺昔人偶　全五卷
柳亭種彦作
柳川重信画
ちゑのよこかろ一家の風とりくく
綴らまさる新考向山東翁ふる曲
亭大人ゆゑ似よくでは　ちゑ
珍書なり

皿皿郷談　馬琴作　全六冊

紅皿欠皿物がたり

頼豪阿闍梨怪鼠傳　前後十卷　著作堂馬琴作　葛飾北齋公画

三井寺の阿闍梨頼豪が鼠と化して奇談より木曾義中都登りの因縁

清水の冠者義高鼠の術を行ふの奇談猫間新太郎の復讐の辛苦

烈女唐糸の忠臣あんど十古今比類

しものかたりより

夢想兵衛胡蝶物語　前後十卷

作者の博識わざと見えたり世界の嗚呼理屈にかゝるも

かゝるまでも膳立てをなす自然とわかつもさすが妙文百べん千度

くりかへしてあきもあらぬ物がたりこゝに常のよく

ぐん知るべかるべしよくまもりつゝ

しるべし

曲亭主人作

青砥藤綱摸倣案　初編五卷

同　二編全五冊

青砥左衛門最明寺の眼代として評定衆の一位となり仁政を施し邪佞を正し明徳慈善をすゝめる物語ありぐん知るべかるべしよくまもりつゝしるべし

稲妻表紙　山東京傳作　全六卷

稲妻の住まりさうな不破の関その句を以て思ひよる不破と名古屋の物がたり夾中新奇妙案の取合せよき計向ふまこと実にいとゞつまのきゝ〳〵ある紀草紙にこそ

本朝粹菩提　前後十卷

あの書い稲妻の後編にて名古屋小山三の復讐に一休大禪師の傳奇ばくろ日へ天下老和尚の活法佛

智力の道化諸書より撰こゝにあつめるし　山東庵主人作

濡燕柳傘雨談　前後十卷　曲亭主人校合　墨川亭雪麿作　柳川重信画

傘に袴ぐつをそろへて濡燕とゝの句にうりてタ題さつけらるゝ（ゑ）彼京傳ずの稲妻と和ゞ燕ゝ廿中衆い名古屋ひきのゝ（ゑ）らもめつてゝあゝこゞせん山東の山ゝも墨川の川ゝ柳ゝらく洗濯せ〜ゝ（ゑ）ゝ

曠精奇談　全五冊

坂東寄席　濡衣草紙　全五冊　苔藥亭著

なんハ殊さゝの珍説ゝ（ゑ）ゝがゝいゝゝ焼失ゝてすゝ巻世にもゝるゝ

昔語質屋庫　曲亭馬琴作　勝川春亭画　全本五巻

繪入物語八剛の戯作のゝ（ゑ）ゝ事跡を吉野の皇居のゝ（ゑ）ゝ麓六田の里ゝ室屋宝珠といふゝ在ゝ由ゝ殺語とゝ（ゑ）其家元来好古の癖ゝり好事のゝを貪ゝて金ゝ貸を生業とゝり或夜ゝ八土蔵の中の物音を聞つけて是ゝ怪ゝ考ゝ（ゑ）ゝ足ゝて登ゝて大和ゝの段階ゝ彼二階ゝ住ゝ戸を息もゝして伺ゝ者ゝ八種ゝの道具貨の贋ゝ精巧ゝ甚ゝ各ゝ才の上ゝ其中ゝて博学ゝ先生ゝ延喜の年号ゝ考ゝ貴重の精魂ゝ判者ゝ夜ゝ（ゑ）ゝの役ゝ（ゑ）ゝ評注ゝ

曲亭翁の滑稽さそなもてものが
きゑくのむうとをる異物を泥世べ
いと数くの品ぶつ別くの古物ハ三
国を経めぐりて果ハ那須楚に終し
とゝ玉藻前の狐の皮衣まこ漢
末の軍師ゑ孔明の陣太鼓紀の名
煮が錦のふくゞ袈裟前まくゝ大
磯の煮が法の品く源家の重宝友切
丸石堂丸が直刀野登りの御半ゑど其
名ゆゑいく説ども古今未発の道
理をばく〳〵古書のあやまり俚俗
のまどひ明らかゝ一
うゞ一度この巻を
理ひとつく万良を発明もゝの教
えをうゝゞ〳〵物の本と
このそよむとも用捨のところ糸少
ゝむちびく書を信じく
よまぬ者のいまゝめ書を
師とかのゝ志のばゝ文学の才子
ともかゝべゝとゝ

平家世をゝく〳〵二十年皇統を
蔑ろ一下を苦しめ非道の行ひ
多ゝけまゝ公家武家とも不忠
を増しあはせ平族のこゝろ
れゝと思ハぬ者もなゝし中に新大
納言成親卿の思ひ立に組し平家
を傾けんとゝ人〳〵
その大将の列ハて、法勝寺の僧
行俊寛ゞ度量武家の人ゆゑま
さり如意ゞ嶽の山中鹿ゞ食の山荘
ゝ一味のこゝろゝ合せ此ゝ
牛若丸ハ平家の容赦とゝゝハんと
都ゝ出り如意ゞ山嶽の山中に
折しも平の清盛ハ如意山の滝ゝ
るさんとて多くの同勢にかこまれ御
所車ゝ押のぼる折しも牛若丸ハ山の
上ゝ見下しゝ目覚しき

平氏の行ふを清盛入道のあのび歩行ん院の御幸に移すさまをいつて
と発して居る所へ義朝の旧臣鎌門
太郎正親といふの牛若の量量たる
めて力を合し大盤石を山の上より
投下して清盛のあの車をうち潰せさ
まで清盛はその車にあらずして
必死を退き正親は打死しうちたる
まとども牛若は大歌を切ゆぶり俊寛の
下部が途中に下して置さる長持の中
ふかくまでそうぞもの鹿が谷の川壮
へかくまでそうぞめて俊寛が対面の
奇談その文章のことやうふかいろ
きこと古今の作者ことまれなるめ
る一且まく牛若が時勢を論ず俊寛
とりさあ平家をうえとまるうくを
こゝろる片見明智その無才に感じて
俊寛夫婦牛若と娘の智にみさんと
えるまゝ人情のふかひを尽くして
かそ牛若は奥州へ下向し俊寛は訴

人の者あつふ〳〵く事ゆゑれ竟に鬼
鬼の嶋のふるる甚ずの辛苦艱難
毒蛇の孝心松の甘の貞実まこと俊寛の童
るり安王有王ぶ忠義あれむべく
かなしむべきのぐうのいと多くまそきこ
俊寛が嶋の段は誠に奇代の趣向ゆそ
看官のさらも曲亭翁の桟関と奏
することあらぬぞ後の牛若が再度の都
のぢり白川の甚海と戰ひて鬼一法眼に
出合みるる姫ちの恋情虎の巻の秘
書をぬく鬼一その問答げゆ源家
の桃曹子九郎義経ともいそろぐ聰
明英智のその風情るりくゆ作り物
ぐうとのやしゆべくぞ凡て馬琴先生
の著〳〵る繪本にあるるるなけれど
別てこれの嶋めぐる伝以て美談
といふるまでこれを第一の佳作といい
らざるゆゑ八犬伝の長編をのけて
この俊寛嶋物語をもつく絶へ今中
最第一番の著編とのべ

荘蝶翁再游外記　曲亭馬琴大人作　全五巻

此書は前小説行々漫想兵衛胡蝶物語の続編にして古今未聞の妙論奇説前板のものに比ぶるに百増倍の夢想兵衛の手功なりて いとゝもゝ世に珍しき新郷を肯ひ出すその風俗教訓を博識年明の普く世界の人情に通ず和漢古人の学者といへども説ざる詮穿に滑稽笑談自然と倚りて古事を正して今様の洒落ふるる俊才文雅と小再びわが国の荘嫁翁ろ曲亭翁の手を経て著作の精妙ゝ〳〵賞紀する競べのめい皆ちゝ〳〵是小ちをまりいくるる丹誠の作といへともこの右みの出ゞゝ〳〵まことに深理醒俗の一大奇書ろるゝべしとあてこゝこの人とゝ

勢薫功誌　好文士傳　初輯　五冊

爲永春水作
渓齋英泉画

第二輯　全五巻
第三輯　全五巻
第四輯　全五巻
第五輯　全五巻

後花園帝の永享の頃南朝の古事に起原梅壺の好文が吉野殿の前後論ト梅士法師説国てめぐりて梅姓の五賢男士の奇功をもり後の道雄を吉く古を招くゝの河肥の城を集る の奇談関東の古跡をこゝろゝく さゞれ又菅神の事ならその神徳利益をもゝ多く古戦場の遺風をもゝしてその持資君の文武の徳沢天が下にかくまでもきた勇の古今美談をもる世り

中本三卷　曲亭馬琴作

[illegible]の表本を珍らしく中形美麗のお仕立一帙を三卷とし画も当時の流行を[illegible]うつされいとて近頃りそこの[illegible]俚俗の痴情をその[illegible]史のくびかぶき拙き草帝の[illegible]でも看官の大いに推[illegible]文法自在の曲亭が書[illegible]作[illegible]の[illegible]が[illegible]中なれども[illegible]唐土の小説[illegible]わ[illegible]人目よりまぎる珍書をさぐりて美婦人の数をかぞへ[illegible]倒の雅びの文章をそいとゆかしく[illegible]これを前代後世の又まがつ[illegible]冊ゝ出版

長編大巻之部

小栗外傳　三編摘　全十八巻

小枝繁大人著　葛飾北齋画

説経祭文にまで名を呼ばれし小栗の判官照天の姫の故事を新に作りし物語なり

更科草紙　三編摘　全十五巻

栗杖亭鬼卵作

勇婦更科姫のことゝ山中麿の月の傳尼子家の臣五十勇士の奇談となりてゝ作ぶ

景清外傳　三編摘　全十五冊

小枝繁作　歌川國直画

悪七兵衛ゲ少年ゝの事をこゝ[illegible]奇談なり

朝夷巡嶋記　馬琴作　豊廣画

初編　五卷
二編　同
三編　同
四編　同
五編　同
六編　同
七編　近刻

木曾殿粟津の敗軍より巴御前の忠操貞烈さもあらけんと思ふ曲亭大の筆刀自任智囲の義盛の能に巴ゝ自害のつさはさ実に義仲の亂と出来る婦人かゝるをありけるゑんと自然にゑん恋歎遺感ことさら巴の尼なんど世人の傳ふ人口ゆゑ叶ひて其意をくさきたるいつゆゑみくの如作どちゝ者ハ嗚呼ゆゑ必らびよりせのゝとらん

鎮西八郎為朝外傳　弓張月　馬琴作　北齋画

前編　六卷
後編　同
續編　同
拾遺　同
残編　同

全本三十卷

六条判官為義の八男冠者為朝の甚三郎ひとりにて九州小下り菊地原の人々を威伏ゝ鎮西八郎と称する保元の乱小都に登て新院の御味方にて軍ゝ丼らまゝ無念の敗軍に猶大剛なる後八丈島にゆき琉球國へ渡海するの珍説すゝて故事ゝ日記ゝ為朝一代の行状いとゝもりするゆゑ亦その生死貞烈あんど尽しがたき美ゝ多く凡よく本の隨一なるべし

六六士傳 水滸太平記 岳亭作 英泉画

初編 五巻

二編 同

三編 同

太平記の中ふて水滸傳ハ忠臣孝子義士節婦三十六人の勇士を
ふくさすぎを種とし忠臣孝子水滸傳のかりむき成太平記に
うたゝ〳〵言丹誠の作といへ〳〵

俊傑神稲水滸傳 右同作 十五冊出来

あまたの盗賊の名をかりて水滸傳の
風をうつしてかりろき作なり

笹前口神灵 新田功臣録 前後十巻

小枝繁老人作
葛飾北齋画圖

新田功臣錄拾遺 全五冊

小枝繁老人稿
荘訓亭春水著

此書ハ新田義貞公の公達徳壽丸
の生立より南朝の天子に忠義の心
ふかく南帝一統の徳世にあさんとひたす
に味方をかゝらの信義ふかくれを補
佐まいらする功臣ぐ誠忠或ハ貞女
節婦の百切手君軍師奥中の才智
歌を敗るの計詐且左中将義貞朝
臣の老臣條塚伊賀の入道石原が
再身強勇と頭し義ふかく佐るの
美談万里小路勝房朝臣隠遁の
後神仙ところり出家化真人とゝ
りつの神通義統の火難未然
よ察ひそその一黨と一旦仙境へ
かゝまこさせ再度世にあらハしく
足利勢を切ゐびけ南帝を快い
うゝそまつの奇軍南朝追悼
の物がたりなり

相馬將門 總猿潛語　瀬川如皐作　訓亭校合　英泉画

初編五巻　二編五巻
三編五巻

○初編より後へ狂訓亭の門人
南里駒人柳魚が継作あり
將門の幼年より悪心ありしと其母
北斗に祈て命を捨て將門を世に
出さんとする節操まさに其臣となる
勇士の傳すべく發端の赴向
奇代なり

木曾義仲 鼎臣録　溪齋英泉画
頼川為松　如皐著　永亭両校合

小松の内府重盛の二政櫻町中納言の
一條ありやそら恐の故事世帯刀先
生義賢大倉谷の最期悪源太義平
の辛苦伯父と討の意味深長

駒王丸の出生實盛の
わかるるの義心其後木曾
の地に成長し今井樋口楯根井巴女
とちぐめ忠烈勇士の幼立伊勢桑宮
の乙女に紛姿幼年より平家の動静
と伺ひ旅中の患苦次弟に英勇豪
傑とあつめ竟に北國に旗を上るまで
後と謀て小事を大謀とせんの
奇談と多く爰にその大畧をも
尽しがたし

初編　五巻
二編　同
三編　同
四編　同
五編　近刻

伊勢新九郎大志傳　全十五冊　近刻
小田原北条宗雲が京都と浪人と諸
國武者修行の奇談なり　為永作

開巻驚奇 侠客傳

馬琴作 英泉画

初集 五巻
二集 五巻
三集 五巻
四集 五巻

此書は南朝の忠臣新田楠の一族なる今谷の後裔志茂をば主として足利の非義を恨み南帝補佐のえかりごとを[illegible]堪難辛苦するの物語すこ楠氏の一奇女姑摩姫幼年にして古今に[illegible]なき才智男烈男子にまさる[illegible]才業九六姫の仙術すべく巻中の奇談未曾有の新趣向多くわりて実に[illegible]巻て驚奇といへ外題ふわりにさて作者の自讃といひつべし[illegible]古より史にむ人の遺憾とする南朝忠臣の外傳なるべいと快な傳記なりし

近世説美少年録 馬琴編

初編 五冊
二編 同
三編 同
四編 同

此書は周防の大内家[illegible]して大江に成る[illegible]信勇陶瀬平郎のお頁に[illegible]其蛇念世に悪頭してわや[illegible]年[illegible]すべて物語の風をかえ[illegible]八犬侠客のおりむきとは大に異なり善惡対つて移く美少年の[illegible]書たるに賀福因果の[illegible]尽そ悦ぶきわり怨むひべく涙を催しまく快然なる栄光を視せわる艶容美貌の婦人にして且婦に且貞ふりすも春情の動ずるおとき場まは此義をて看官に改もる所の段も備り誠に古今の奇談也

大内奥隆十杉傳　為永春水著

初集　五卷
二集　同
三集　同
四集　同
五集　同

第六集　上帙　四卷
　　下帙　四卷

防州山口の大守大内分の家系を六ヶ敷し且大杉と代せざる徳行より杉と云ふ字を冠らする名氏の勇士十人十方に出身して文に富み武に長ずるわり見まげ山を崩すの剛勇わるびれの業を身貫神仏前の妙手わるびれハ天文地利に達し亦ハ未然の吉凶を察する易術の神占十勇者得くる才覚多くまさに十人に従ふ侠気の勇士ハくかこより起つて牧十人終に周防大内家の招に應じ志を共に運を同すの美談なり

第五編よりハ作者前々の麁漏に恥く丹誠の著作制作本のものとも精工を尽くして佳紙上摺の新版なり

全十五冊

双玉傳

宮田南北著
歌川國直画

尼子九牛 七國士傳 初集五冊 為永春水 松亭金水作

同 第二編 全五冊

松亭柳川重信画

雲州冨田の城主天子氏の由来を始め
尼子と改むるの縁故を發端と
細川政元の僭位によりて諸侯の
會盟にもの申さず九牛の命を佐け
る二術によりて牛の字を号とし
る勇士集會そ義久を補佐し
中國に威を震ひ四海に名を挙ぶ
の美談つぎ出板延引
五編全部二十五巻出て満尾と

南総里見八犬傳 初輯 五巻

曲亭馬琴編次
柳川重信画図

そもそも安房上総の國主と聞えし
里見氏は清和源氏の嫡流八幡太
郎義家朝臣の十一世里見治部少
輔季基の商男義実なりて安房の国
主の元祖なり此書のはじめは室町
将軍義教公と鎌倉の持氏朝臣と
確執ありて後に園天皇の永享
十一年二月日持氏父子ともに後持氏の二男三
国寺に切腹わ〻ま後持氏の
男春王安王の公達と結城の氏朝
すでにして義男の人々かたらひ
集め里見小栗の豪傑と中ふ
結城の城をもちかうそ永享十一
年の春より嘉吉元年四月まで籠
城三年にもよび糧も矢種も尽る
より城兵ことごとく打死なしまゐらす
孫の義に義実の後城を落去る人

○あり其中に里見又太郎義実の
父季基の遺訓ふるゝびよませて
切ぶりて城を居き相模の国三浦
ある大取の入江に落延てたれかり安
房にはさらんと心がけ龍の昇天する
を視て老黨氏元ホ長を訪て告せ
るゝ才智小舟に乗て安房の
国へ渡るの發端まこと安房の国ハ
麻呂安西東條とゆふ三家の大名
あり此内東條の赤を継し平郡
滝田の城主神餘北弐とゆふ大身を
の臣下山下氏の為に亡び麻呂安西
山下とすでに里伐の起らんとする
虚ホ来りて里見主従竟ホ三家を
打亡ぶし頓て安房四郡をたゞのふ
の美談をもはしにゆとも其ゆへに
よりて里見の姫君房とゆふ犬ホ伴
ゆまて同国冨山ホ入の奇事役の
行者の神徳まこと玉梓とゆふ美人の怨
念をとゞめしの法法の筆ホ真似

○あゝざる曲亭の妙文第一の巻
より四の巻の七回まで八日数八十余ケ
日のゆをもちる第八回より八十六年後
の物語を説き義実の臣犬飼十
郎とゆふの伏姫の跡をたゞひ冨山へ
いる路谷川まるぶすゝ金槐
大補孝徳とゆふ者八房の犬をもち
もて伏姫君を救ひまゝせんと飛道
具をたづさへ冨山に日ゆ登るを以て
第五の巻の終とせり初編ゆゆ
ざまでの里見八犬士の名をもて記
もて外題を知らしむ

犬山道節　同　志之
犬塚信乃　同　毛
犬坂上毛　同　毛
犬川荘佐　同　額
犬村大角　同　勇
犬飼現八　同　玄古
犬田文吾　同　少文
犬江新兵衛　同　吉平

里見八犬傳　二輯　五巻

曲亭主人著
柳川重信画

この編一の巻に義実朝臣の夫人五十子伏姫の代身の上を述べ病に伏のふち義実夢中に役の行者の告を蒙り亦其臣堀内蔵人負行者異人の告にて東條を出て滝田へ来て主従奇異の思ひをなしひそかに富山へいる始末さて伏姫は山中にあて法花経を日ごとに誦ずる犬の為に身をけがさじ手の春秋を過し或日神童にあひて因果の道理を感得して陰陽の所為なるを知り怨念善果を勧め里見の家を滅さんとしむ犬士出生のもとを紀さて一段かくて金碗大輔が家に八房の犬命終落て伏姫の疵を舐て倒れ死しかの犬

輔後悔して自害ふかくめ義実猟矢をさしてその子を殺さんとす主従ともに姫君の自殺しまふ前後の條下はいまゞ古今にまれなる因縁因果の道理高僧智識も不及明辯解説何ぞ親子の秘情を

やうふかく賢将と才女の覺語ひとなるを聖母とづ應答志操水晶の珠数八ツの玉八方にちりて八犬士を後の世に現ぜしめの最期且五十子の方の病死大輔発心して、大塚

とおのつゝ八ツの玉のゆくえをたづね旅路へおもむくさて第三の巻にいくつてのふさび初編の一のまゝ結城合戦のゆかりとして里見と同志く龍城しる鎌倉の忠臣大塚匠作その子番作ゲ結城を落てゆく君をまく人とせゞることゝ

ぞ美濃の國樽井の宿あてすでに

両公達のは最期の親子言合さねどもこゝろぼそく紀にとゞめて金蓮寺とゝ寺の法場ゝ京軍三百余人ゝ父臣作ゝ討死ゝ君ゝ子ども七人の子番邑作ゝ君の首どうぞんと立のき木曽の夜長嶽ゝ所すぐ落ゆく拍華庵とゝ寺ゝ宿り賊僧ところあそこそこびけのまゝ手束左ゝ名のゝ奇縁これこの手束ゝ同く結城ゝ龍城かまくらゝ君の為ゝ結城ゝ龍城あるゝ井の丹蔵直秀とゝ人の娘にてゝ大塚信乃ゝ母ゝ手束ゝ子孫すゝけんとて滝の川ゝ弁天へ日参して長禄元年ゝ同ゝ三年の九月すゝ一日ゝ夜中ゝ参詣の路ゝ小犬を伏せて伏姫の神霊とゝ名をこれゝ名のゝ寛正元年七月戌の日ゝ男子を生の因縁ゝ犬士の一人大塚信乃とゝ名のはじめて二編目第三の巻二十七丁目にいろ〳〵ゝ世さて番作手束ゝ当に男子を女子のごゝ名をも信乃とゝ名ゝ番作手束ゝ国夜長嶽の拍華庵ゝ信濃のそのゝを忘れゝ受領のまゝ信濃の後を寿くゝ落人とゝ大塚氏ゝ大塚氏ゝ三年の浪人中世紀のゝ番作のゝ大塚の古ゝのゝ番作のゝ腹ゝ市ゝ世とゝのゝ墓六とゝ智とゝ父臣作の結城ゝ龍城の功ゝ持氏の末子水寿王の再び世ゝ成氏公より賞とゝ村長とゝ繁昌とゝ番作湯治して金瘡をかさんとゝ又ゝ諸所にゝ居る間のゝ墓六を憎む番作を知らぬゝ

さまでも村長ろれば家富て安楽に
心を番作へまぜく其豆過を此ホの変
でよくこゝろ作り物を思ハぜて忠臣孝
子の名に恥ぢをとゝ者ぞ有宦もわゞ
旦栄枯盛衰のゝ八ハ人の人ゝ武
蔵の国の名家豊島左門の一族練馬
平左門の家臣の娘由緒正しきも不幸
にて嘉六の養子こゝろ濱路といふ
の美婦ハ貞実なる養父母ハ
少しも仇ぞうめ笹ハ
りのゆて甥の信乃を濱路の婿よ
て村雨丸の刀をゝ入鎌倉殿へまち
せをするのハゝ其ゝ外種々の物ぐう
畧ゝ也ゝ番作自害ゝ邸
信乃ハ伯母の家笹に年ゝ
の家に頁蔵といふ者あり此人ハ
伊豆の国茅の荘官大川衛士則任
といふ者の一子手名荘之助とゝ
長禄三年十月朔日に生れ
二編め五の巻三巻終ふ

ゝの巻のはじめ八ハ信乃十三才ゝ
ゝ八ハ伯母に守ら八まる
物ぐう額蔵心を尽して信乃の為
ゝ笹ハ番六ハ好て告あと及び番
作の三年五月の法事の後信乃ハ墓
六の夜引ぞり濱路とともゝ
の二段目すく信乃の母手束が拾八奥
ゝ毎ゝ西郎太の死骸を根に埋ゝ八房
の梅の実に仁義礼智忠信孝悌の
文字わゝ八ハ一奇説ゝ八ハ
て文明九年信乃ハ十八才濱路ハ十六才
とゝ豊島氏と管領家の合戦
ゝて文明九年四月十三日臣円直ハ千
葉の人々豊嶋煉馬の由勢をうかゞひ
江古田池袋にうち立ゝ濱路ハ
厚く実の親兄弟の練馬にあつゝへ
愁ひ歎く心ゝ信乃ゝ心を

告んとするの情合あるに同じ村人
糠助らの百姓かなて信力とみづから
厚く其の死にのぞみて病ひの苦
痛を堪へコヒグ身の素生をかたり一人の
実子玄吉とふ小児の成氏公の歩兵隊
を勤むるの玄
吉と云ふ小児は長禄三年十月皆安房
の國洲崎に出生せり実の父母養親
もさて長ぜとふわどの氏も系圖も立
血ゐ絶ぬ天性神天の感導ありてや
後に犬飼見八と名号し大士の一豪
傑上宮六ゲよりて濱路と妻にせしとふ東代
筑上宮六ゲよりて其又も左兵次郎と
ふ人の墓六ゲ
神宮川ゆて信力が秘蔵する村雨の
刀をもて悪事信乃いたれとゝびて
村雨と成氏公なてすつとて古我へ
其跡ゆて筑上宮六濱路と姻
儀をなんとする夜左兵次郎と無体濱路
なりれて立退られり木綿屋堀山ゆて

左兵次郎ゲ村雨の太刀と三世代せ
国祥に無法なる日ゲ腰元なるも
濱路ゲ一念左兵次郎を打とて
とれ為め殺されんとするその長ものの口
ちき風情者官者を握り秋勇場初
編より九編の作者の大切の巻
ふいろく鬼ゲ奇せ山既ゲ濱路ゲ
信力左兵次郎ゲ左兵次郎ゲ
ゲ殺ゲ
人らゲの人定の穴ゲ
郎と云濱路と兄妹の
村雨の太刀
ゲの兄大山道郎左与と練馬の党
天ゲの豪傑八大市一人の英男ゲ始
ゲ名を世ゲ山さき額蔵の壮助道郎
と戦ゲ
蕃六ゲ左ゲ
左ゲ害ゲ
カ人ゲ疑ゲ
さて牢屋ゲ

信乃ハ村雨の太刀をすくひ上るを
ゐ心づき直載の御所ゐ成氏
公をそすつり処その太刀の偽りなるゐ
よりて疑ひとがもつ敵國のすハー者
あらんと既ゐ命ゐも及ぶとする難
儀となりゆ[illegible]も耳届けられねば
犬死をするもちゆく多くの捕手を
切ちし方へ追散す一人當千の刀量
早業実ゐ故人番作が若君ぞく
ゐとそ博井の金蓮寺に勇とあるハ
その弟なるゐわゝ女姿で青ー信
乃の柔和とれうゝ寺がハ大声の
初筆にあらゝ山ゝる裡ゐ恵
ゐる曲亭翁の自然の妙作後ゐ看
官の眼にさすゝ錦繪ゐ摺いで
祭礼の行燈額面にまで画写に
古戦の御所の芝流閣にいたる信乃
が血戰ちゝばの糠助の実大覧
八信道ゐ信乃の斬ゐ閣上へ登りて
両個の組打が第三編の大詰あり

里見八犬傳

漸我の城中芳流閣の屋上ゆく彼の
犬塚信乃ハ多くの組子を打破りて
憤然ゐるその所へ犬飼見八ゐ登り
来りて互に武勇をあらひそゝ組
ゐるゐゝ坂東河の岸につゝぎ小
舟の中へ両個ハ組ゐる俱ゐ落入り
小さきを流ゝ流ゝ沉ゝ方をゝ[illegible]
成氏公の下知ゐゝ新織物太郎ゐ
ゐて追手の役とゐゝ[illegible]
飾郡行徳ゐ古那屋文五兵衛と
いへるの鈎ゐ出て小舟の流れ来るを
見ゝ[illegible]ゐ彼ゐ知己大飼
ゐとゐるゐ抱色見ハ[illegible]
甚ゐ信乃ハ[illegible]
文吾兵衛ゐ素生ゐ[illegible]
ゐゝゐ乃ゐ今ゐ[illegible]

西土にたちまち兄弟の義を結ひ伏姫神
夷の王の奇瑞古君屋文五兵衛が安房
の神餘の忠臣〳〵那古七郎の弟なりと
いへ因縁其子小文吾の長袖三年十一
月の生れなれども前ふ見八犬業
のはじめを結びをりて大塚の糠助が見八
のいもうと文吾とゞ十郎捨ものさんと
せしを足逕見兵衛が貰ひ文兵衛
が方にあづけしとより縁をもつ
但好すぐ初編三編の因縁別世に
なりてくわしく因なれども讀ませ
ふしの奇談連綿する義ぐわごとまと
稽古の小文吾の嫌智房八といふの
反目の苦身義にとらく信乃の身代
とりの奇妙の仕意その間ゆへ金極大
浦〻大坊が念王といふ修験とうり蛋崎
十郎が子土郎といふ者観得と号して
実〻犬士さとりの内意を異家より
兼て行徳ふ相模と性者の一回房八の
亂ふ小文吾の嫌ねい女が産る小兒後

ふ犬江親兵衛とうり殺りまことふ
つく伏姫の神夷大八をもくふく
一條まごとよの五者八文明十年六月
二十日より説いごして四冊の中八回二十
二日の夜すでをもくんたその時刻八二十日
ダカうり二十日の夜あけすで一日二
夜の物がうり者も同ド所めとゞ
ろ者ふ述ごとゞふ者官道屋
さなぞとの五冊ふとを神ふ教恋
無常ふもかけ〻ふ
今の美談とらべ〻

里見八犬傳 第五編 全五巻

曲亭主人編次
柳川重信画
溪齋英泉画

大塚信乃古郷近くいうを額藏
の無失ふをれを竹で小文五見八
とゞふ場にをりて荘助が板ふの
勇川大軍を切ちし哭士をれより
戸田川ふをりて再度の危難ふ郎ふ

力二尺八寸の二人の力士大石が陣番
の兵士を折きそ大士をすこひ退つ
するの使ふ妙義山中の遠目
鏡を以て荘助大山道節の姿
視るの奇遇の糸口説ひそ
ゝ道節ゝ村雨の太刀を貴ん偽
ゝ定正を祝らの復仇の種ん巨
田助友の遠謀によつて道節軍
小寺巻ますぞ小危ふき折ゝ四大士
の行合によつて大山ハのがま四大士
が互ゝたゝざるの大戰大士相合
て相撲を西文の地蔵堂小道節荘
助首級をわゝそ暗試合上野の国
甘樂郡荒小茅山の賀村の住音音
とゝの差女が大山道節に因縁ある
ののぐり其新郎曳手軍節の
天が貞孝ゝ三ん力二尺八が妻ゝ
れすぐゝ讀ゝる毎に因縁の浅
くゝぎる奇談古今の小説小伝ゝ
めざ巳ゝ男戰ゝ秋ゝ歎の場ゝ

を分る相向荘助道節ゝ度の出
會死ゝる者を陽人已現在の死屍
せゝ三ゝ作意陰鬼陽人ゝ
判ゝ三ゝの奇妙ゝ
わゝぎすゝ大山道節が火道の林を
ゝ取る業ゝ其秘書地
所焼すゝ焼ゝ男ゝ
所合図ゝねど地坑の火炎ゝ
て巻る煙ゝ方ゝ
打捕ゝ大山道節大川荘助大飼見八
大甲小文吾大塚信乃五犬ゝ寄手を
一刀ゝ文吾ゝ
ゝ白井ゝ軍村ゝ押ゝ大飼
見八ゝ松ゝ
色ゝ高ゝ五犬ゝ
ゝ色ゝ威ゝ女音音ゝ
平前名姥雪世郎ゝ二人ゝ大胆ゝ勇
ゝ七げゝ其ゝ力二尺八ゝ像具ゝ身
甲ゝ鉢ゝ

音音八長刀をふるひ五大士諫めて
荒井山を落さんとする忠烈赤心兵
天の勇士八ろりくみうけ武士乱軍に身をくし
單節の美女すべさすが小豊嶋家
の臣下ろりひく武家ろくさいさみも
うせぶ七人男三女一同小死をこがめる
梵村子小汁ぬぎる一大事この五の
巻をよろふいてくれば次編の多元
まわるぎるをいらつ程ある見物も
あるべーすぐく初編よりて小至く
巻毎佳境多くとのびもロけて山
五編八作者の為小苦心の場多く
三大士法場をあぐ
救ひまと石田川の々
沢山小定立を討ひ
ひそのゆ〜小よろく四大士ガ不意の
難戦さそ五の巻の梵村すそ巻中
軍談のごとき場のこゝるを筆力の妙
ふろく世話人情を尽されたる実に
曲亭自然の秀作といべきものこ

里見八犬傳

第六輯 全六冊

曲亭主人編次
柳川重信画
溪齋英泉画

上野の国甘楽郡荒井山の麓ゆ
五大士自井の城兵と再度合戦より
世四郎音音ガ必死の働き家に火を
うけて山林草野を焼拂ひ焔ゆ小
紛まぎく犬士乱軍に身をくし
曳き単節ガ行方を追ひ小文吾
途中小野猪をうち殺すの強勇
他を助け宿ゆ求め却て其の身を
わやうくに船虫とのこ毒婦のため
小火ひ甘ゆれそまうり石濱の城中ゆ
奸臣馬加大記とゆの小憎をうけ
押込とるり月日を過すこ小その
大記ガ悪計を見玉の奇特によりて
すぬりこ舞子の為小ゆのひ行れ
難をすくく奇談舞子のひ玉ゆ
くりのの実八犬坂毛野胤智さく

智勇兼備の美丈夫多く数の大敵を打取の美談ハ文吾毛野ハ[illegible]千葉の城を退れ大河の中隔てられ七両犬行方ハ[illegible]犬飼見八都ハ伊住[illegible]旅路ハ[illegible]下野の国真壁郡[illegible]といふ所にて庚申山の怪談をきく[illegible]む一大士に化せ一怪物ハ矢を射ハ悩ま且山中ハ[illegible]大村大角の父一角といふ者の亡魂ハ逢奇怪[illegible]も赤岩庵山の談ハ古今にめづらしき[illegible]殊に今ハ現前なる仙境の勝地多かりしかの山の変化神通をりつて一角を殺一怪物一角に化して孝子と甚しまさしの残毒ハ[illegible]角太郎の重雛衣[illegible]貞節犬飼見八一角の頼をうけ角太郎[illegible]大士の由来[illegible]大村の一人なりしことを發明する[illegible]の一條大村の玉を持て[illegible]奇談此巻の殊きハ面白き新社向の多かりけり

里見八犬傳

第七輯　全七巻

曲亭主人編次
柳川重信画

[illegible]ハの巻ハ犬飼現八ハ下野国安房郡返壁の白屋ゆく犬村角太郎礼度と文武の道を論ト居ふところへ継母船虫といふ女角太郎の離別せ一妻雛衣といふものをつれ来りて角太郎の利害を解て宅ハ入ざる奸計をたてゝ船虫とあく現八ハ[illegible]を受て船虫思ひ角太郎のこゝろふそのハ様子をさゞ〳〵と一角のかへり多くの門弟剣法をところ〳〵あらく〳〵打倒して勇威をあらハし其夜に入くまなく多くの門人等ハ害をるさんとするを[illegible]て角太郎の家にかゝるうてきこと

一角船虫八角太郎の方ゆいうるとも親の威光をかりてあさけるくも雛衣ハ自殺をさせ胎内の赤子と共に行くなるのみならんとする非道の王の飛出て一角をうちたをし終ハ二犬士偽一角の猫を退治するの奇談ハ毒婦船虫ハ竜山の逸東太郎の妻ハ縄目を退きざるの婦言十ハ乞犬飼現ハハ信勇まことに苦今の傳記ハ多一第一の巻より第三の巻ハ美談にて犬村の殿を説たくされ第四の巻ハ犬塚信乃ハ諸国をめぐりく甲州巨摩郡富野穴山とゆ所ハ鉄炮ハ名る武田の家臣泡雪奈四郎とゆ人の娘を打もて武勇ゆ名ある同国猿石の村長木工作とゆ人の来り奈四郎と信乃を伴ひて

その家に住くるそもく此木工作の家ハ信乃ハゆゆしてあるのをるくぞ木工作の中ゆ娘濱路とゆを里見家の息女五の君とゆるゆゑゆゆく在せ〜と乞ふ鷲の為にきくまて此国の山中に五ゆくまでそれより木工作ハゆゆ信乃ハ濱路の夫ゆ恋情を告ゆと五の君の濱路姫の躰をかりる奇談まて信乃ハ恋情を告ゆと五の君木工作の妻寡引とゆ婦人奈四郎と密通してあるゆゆ信乃と濱路をありぞけんとする悪ごゝろ木工作をゆゆ信乃を罪ハ無失の罪ハとゆゆ信乃ハすぐゆ武田家へゆくゆ所に井利兵衛亮元とゆ人眼代役ハ犬山道郎とゆ者ゆ信乃を庫の内より出ゆ濱路を連ゆ退くこの後へ

誠の堯元来りて家内見分の一條
まさ武田信昌の明君ゑ也不同国
石和指月院とゝゞねて、大和尚信
道部ゑ對面しゐ仁德まぐく善
悪の政事あゝゝゝゝのゝゝ
いろ尽くしてゝゝゝ此段ハ第四
のまゝより第七の巻の八丁目ゆく
説終ふこゝゑ犬田小文吾ハ伊豆の船
路ゑ難風ありて嶋々に年をおくり
ゆゝやく浪花ゑいろまゝ北陸道に
くだり越后の州新羽郡小千谷の
里に旅寐して同国古志郡二十村ゑ
闘牛の神事と見物まこの闘牛越
後の国ゆて実に名高き一奇事
いろさまゝゝ和漢の古事をひね
角紙の古実ゑいろまぐくし
まゝゝいぐさまたれが例のはゝ
あぐゝと同ゝゝぐぐ看官の為
ゆも益多くよむゑ隨いて佳境ま
まくゆぐくゝ

里見八犬傳 第八輯 全十卷

曲亭主人編次
柳川重信画

犬田小文吾ハ越路ゆて牛合の場ゑ
大久紙頭ゑもり彼毒婦船虫の賊
所業くゝ猶偽誓ゆて小
文吾をさゝ殺さんとあて捕られ土地
定めゆゝと古き東田堂にゆゝゝ
ゝと犬川荘助なゝゝゝこれ殺
ひ賊の隱ゝ家にいろまゝ船虫事
う月ゑ賊の頭酒顛ことゝゝゝの小
文吾ハ逗留くゝ石亀屋次郎ゑ夜
打みすの悪行ゆゝく小文吾荘助ゑ
皆殺しゑされ亦犬田犬川ゑの一車ゝ
領主にゆゝく毒婦ゑの為ゑ死を
なまゝゝ老臣の内計にいろく命を
するゑ東使二犬士の偽首をもて
旅中大坂毛野ゑ見合せるのゝぐ
ゑ毛野と見合せるのゝぐ犬塚単
男ゑとまゝく二犬士ゑ別と犬村大

川上住河原に戦ありとうかがひ
[illegible]の命に及ぶの大変を聞かひなぐる
無失の難[illegible]女のかすりのその場を
のがれ住河内の大山大塚に生まれ
盗賊の本人を捕へ無失の罪の證を
えんとて徳川の郷士永垣親[illegible]と
戦ひそ[illegible]めて賢士のかもとを
初[illegible]
亘親子大士の味方[illegible]るの美誉
人法師麻布の[illegible]穴をたづひ
浄め一郷の害を除くの奇事湯
島の社頭に才子薬[illegible]
五十子坂の戦[illegible]
する大義すぐ[illegible]の春ば犬坂毛野が
[illegible]美誉多く亦その際に
いろて船虫　司馬浦に刑せらる
悪報毛野と　いずれも犬士司馬
濱に[illegible]て密に毛野と
[illegible]の城を[illegible]
いろ毛野仇討の場[illegible]

曲亭主人編次
二世柳川重信画

この巻、文明十五年卯正月廿日の明ぐ
る犬坂毛野信賀、父の仇竜山道東太
縁連を打ちとり武蔵の国品川なる
鈴ヶ森に戦を初めて五十子の城兵
[illegible]小田原に使られば罷重る傾え
[illegible]恐れ只一人数人を切破
つく終に本意を達[illegible]その血戦
[illegible]危き周情眼前に
[illegible]犬坂只一人を東西よ
[illegible]合[illegible]すべき敵の[illegible]配り既
[illegible]の難戦のまりに毛野に仇ハ
猶[illegible]二人の[illegible]太刀西の[illegible]
[illegible]の犬田小文吾東の路[illegible]犬川荘助
名の[illegible]打ち出[illegible]
[illegible]歌討文法筆力自然[illegible]
[illegible]散當[illegible]
[illegible]の利勇の徳わるごとし　亦

谷山の伏勢仁田山晋吾を打くその
馬をうたんの傳らき敗軍の注進を
いなて肩合定正五子の城より加勢
ホ出馬を忠臣河鯉守之これを諫て
後の自害は定正諫をきろぞ三百
余人を品川ホ操いぞ大飼見八大村大
角犬山道節の三大士が穂北の兵兵
ホ伏勢とのくらふ切さてらと剃さく
大山ホ鬼を射ちきれさんぐの敗軍
さて可鯉孝嗣のすくまてろぞ
生こ犬塚信乃八千余人の小勢故
て五十子の城を焼打して来取倉庫
を ひらき金銀米粟をとりて重度
下の村民へ施し徳をわかして
五十子を立去の信義あど十余年
されるう美談らすく多し旦河
鯉孝嗣大士と古戦して男成を落
さずれれる犬士品川をらむぐく舟
路の退口で一言のりまさるるるく
古へより軍記の文段ちまやくるるぐ

多ホ似くまどもいまぐ丘八犬傳の
ごとく至ちにくせ修羅場のもりもれ
絶とのし江湖の軍談師ごと是非も
よくて古制の助とあすべきそ定正
う愚ホて忠臣を疑ひ国家を保ちる
ざる段ぐハ更に実録のすけるん
大士穂北の郷士の家柱コ
旅ごも安房ホ義実隠居せられて
義成里見の二代とわりぐくみその
段ホ過ぐ中ごもくしたぐそ
看官のこれホ無多く長編ゆして
よくわまりかぐえちびのわ
をも鮮てのくせ小事すれるう或ハ
上総の国夷蕩郡館山の城主これ
墓田権頭素藤とのハ者の素生
まさその者ガロづホ鬼語をきて
一城の主とるし奇談こ
尼とのハ母き尼の出未さ素藤
の西城なとけ里見家の姫君妻
ホるさんとのハ一條ようたかりど伝

りつく里見の若君をうばひとり長を人質とし一向非道の合戰をなし里見義成をこづつまんとする伏姫の神夫の神通をあらし遠く義成をさしとさるゝ奇事ちゆゑ義実が伏姫の夫をすつゝんとてかの姫君の高山に終長禄元年より二十有余年の後たゞめて富山ふかの人この頃安房上総の二州ちゝぐくを手に入れ滝田の領分との八伏姫神夫の在しまく富山ふもと由断せゝこゝろ麻呂安三人山深く入りのふきき麻呂主従西の残党こもまわ不起ひと宇て既に義實朝臣あやうく危所へ里びの少年犬江新平ゝ一人わゝまゝく悪漢どもを叱りとちまて突立ゆきゝ憤然とゝく いとゝ紀よきゝ童ゝ里びのゝ画紙りつくゝろの六冊めのむすびとなゝくり

里見八犬傳　第九輯　中帙七卷

幽亭翁編次
柳川重信画

この巻八上帙の終ぐき富山の物がたり犬江親兵衛が伏姫の神夫が護ゆ依てこゝろ九オの童子とゝのオ力稀代の働きゆゑバ部の忽ち感伏ゝて里見ゝ名ぐ八亦姥雪与四郎その妻音音その嫁雪乃里郎もおゝゝく富山神夫の眞敢ゆゝり同居ゆ殊ゆ力二尺八の鬼を二女ゝの小出生せゝ奇談をとゝう犬江ゲるゝゝめゆ義実の免ゝ七ゝて館山ゆ使者を送ゝめゝ勇感明ゝと以く城主ゝを志そゝゝ一ゆ以ゝ義実が藤を生浦館山を平定ゝ義成信忠あゝ逆賊を免ゝ素藤追放ゝゝと山ゆ八女僧妙椿ゆ再會ゝて その菴ゆ住女僧とゝのゝ出前ゝ八次巣にゝゝゝき美人ゝゝ色香ゆ愛

て情を通ト淫楽をはじ其後妙
精の奇術濱路姫をとゝ其藤館を
を迷ハ大江を逐さの事藤館を
夜打て里見勢を追ハ再び城主
とゝり妙精ことの水果を極め里見
勢ことを責て敗軍ス其中央
妙精がさゞくの所為をえて濱路姫
を盗出し途中にて伏姫の神夫に
手ゆくされ且胆を踏られてとう邪術
ちとゝう義成後悔して大江をめ
かさんとする一條親兵衛が武蔵の国
ふいくり上野の原の茶店ゑて河鯉
佐太郎ゝ忠孝のゝ大坂毛野ゝ
鈴の森の仇討その外大士の噂ばさ
かゝ河鯉氏の無失の罪をあやまし夫
狐化て腹の刀自とゝり河鯉を救ふ
の妙術大江河鯉をこゝさんとたゝり
ハ成ゝ途中ゝ星ふゝ五の利剣ちゝ
ゝくこの九輯中快士巻の尾ゝゝ
ゝ巻毎新奇妙談ゝ〳〵

里見八犬傳

第九輯 下帙上五冊

曲亭主人編次
柳川重信画

犬江親兵衛河鯉佐太郎戰を止めて
両人の名号合再芽艾茶店ゑいくり
あれ互に身の上をかたることゑ茶店の
婆ゝ面影能腹の刀自の自ら似ゝ
ゝ婆ゝ河鯉氏の母に命を救れ
ゝ狐ゝその後に乳母と化て佐
太郎を中ゝ一奇談政木狐といふ
名ゝ神通力をて安房のことを自
ゝ犬江ゑをゝ頓ゝ政
木の老狐ハ不忍の池ゑ入龍と化
昇天ゝその神霊高国河原に犬江河
鯉責苦を視て犬士に因みある次
團太ゑ名号ゝ奇遇里人の舌妨
をゝもこゝして味方をゝゝのゝゝ
ゝ河鯉氏名を改めて政木大全と
ゝ後年里見家の名臣とゝ
ゝ殺功ゝゝ崎士郎に會て

上総に渡海し再度館山の城郭
勇にちからをくぶりかへして素藤を生
捕て妙椿狸を亡ぼすにけりそもそも
この妙椿といふ妖女僧ハそのむかし八
房の犬に乳をあたへ育る狸なり其怨念
ことのつきも犬ハ菩提をとふらふ怨念
をなし狸ハ王梓の餘怨いまだ消ず
里見に祟をし因果ハ初編のむかしより
に過しよりここにいたりて旧きをもから
さぞ誠にふしぎの妙作といふべし
さて義成の仁政館山の民を賑ハし
素藤を誅して功臣をそその父
江ハ大功を他人にゆづりて結城に
おもむくかの地においてハ、大和尚
七犬士とともに里見季基の尊霊
をとむらふ古戦忠死の霊をまつる
その法場に思ひの一大事おこり
来りて七犬士の危難におよびの嘉
吉のむかしを思ひ出て結城法莚さき
きるに修羅の備えが春尾なり

里見八犬傳　第九輯 下帙中五冊

曲亭主人編次
柳川重信画

此春ハ義烈院殿里見季基の追善
結城の古戦場ハ大庵の法事を行ふ
ことを逸匹寺の住持徳用といふ悪僧
同気相もとめてる結城の家臣長城
枕之助惴利堅名衆司経稜根生
野の飛雁太素頼などといふ者をかたさ
らひまして徳用の弟子なる堅削なんど
凡そ三百五十四人三手にそなへて法
場をせめんとこのさわぎに七犬士ハ僧
をやとりて二ケ所にこもりし道節大角
毛野ハ、大庵に残り荘助小文吾
現八ハ林の中に伏し信乃ハ蟹崎氏
と、大法師を守護して立退く犬士ハ
敵を生捕て退ろとしけれども信乃ハ
途中に大敵とのぞみひ左右川の辺
にて徳用とたたかふ最中、大法師と
蟹崎氏ハ強勇の惴利が大軍にかこ

まれ既ふ君をきその呼へ犬江親兵衛仁ゲ来かゝて忽ち大敵をきりやぶるされどもこの時仁ゲ同ニ一くるる政木高嗣石亀屋次郎太朝三の三人と仗勢の鉄炮ゆてしとゝつれうさて八犬士ハこゝふたゞめて相揃ひ大と蛮奇氏とて介抱して六道山能化院教主るこゝの荒寺に休息ー仕城の追手とまこ呼へ城内の侍者小山太夫の次郎朝重といふものきたりて諸大士に無礼をこゝ出事をたゝこゝふそのむし嘉吉元年七月六晋ふ地蔵尊を建立て里見季基の菩提吊らひこゝ浄西坊俗性十八といふの忠義を子栄西法師の孝心あるこゝハ伏姫の霊神風を坊こして難をまこゝ将車地蔵の霊妙ふて犬士の難を救度もまくゝ神通力六道山結城七郎朝光の建立せまこゝ又ものめ其ものあ甚とまそゝ因縁奇談巻ゞふそゝいとく入組

くる前後の分解実ふその場を眼前ふ者ゝゞゞいう尽せ一例の地文よくゝゝふゝ長編の奇作を貴ーのゝ巻ーさそへ犬士ハとゞの情願ゞとんゝかゝく笠房の国へいろゝ稲村潼田両城へまゝゝ里見両君目見ゝ君臣上下数十年の本意をそゞるめゞゝん食遊美談るゝくこゝふ思ゝそもいとまゝ

さそそれよゝハ犬士の本生を金鞠氏ふゝさんとそゝ大法師と評談ゝつくやゝゝゝの長に定めゝれ京都将車義尚公へ使せ来ゝるの一條その間ふハ白濱の無量山延命ちふ季基の美棺をいとゝまゝ法遊ゝゝ妙直ハ曳子一節ゞ犬士親兵衛との再會ゝつ七士も新古のまゞし対面ふゝろこゝハきゝゝ多くゝゝ

て親兵衛ハ都のゞりの大役をひつけくまゝ蛍寄照文と船路をこゞゝ三つの国苛子寄とゝふ湊ふ風待て

海賊の難ふいぞ有て大変船商人
とりで立る海竜王修羅五郎とゝよ
海賊の頭と水中の難戦姫雪代
四郎の水練によりくわやくきとのゞ
き照文い陸ふおいて海賊の首領
今純友査勘太といふものと大戦
し既ふ必死とゆりしゝ三河
のくふ奥郡の城主陸尾判官伊
近の賊を制する軍兵の加勢ふ
よりて功をたてそをもつて都へのぼ
り管領政元へ移ひ将軍に金
銀をたてまつり且金碗姓のことを
天子に奏聞し首尾よく安房へ
くんとゞ所ふ細川政元
犬工をもつて許さび西長
在尼豊漢志をや千里独行
虚五関といふ句にいりて巻を
おさむるやく次編を
よくこゝろのべ

時代物の部

小野小町一代記　全六冊

安倍仲麿輪廻物語　全五冊
はいまハ安倍仲麿入唐しその奇談なり

繪本菅原實記　前後十一冊

繪本玉藻談　全五冊
はいまハ玉山先生の画作ゆゑ三国
の人物をもくそのさまを尽されり

繪本三國妖婦傳　三編揃十五冊
前書に同じうゑれども玉藻前のふん
いうていとの物がたりをあらとすべ

奇談怪談の部

英草紙　全五冊

繁々夜話　全五冊

秀句冊　全五冊

祇伽ぞうし　全十冊

こゝまハ奇談怪ぶんの種本ともいへきものゝ古今の珍説を多くあつめたり

遠山奇談　全八冊

小夜わし　全五冊

奇談怪談の実説を編輯したる冊紙わく古今にわたる書といへべし

兎月物語　全五冊

一二草　全五冊

風草紙　全五冊

この類ひの物がたりハ数百部あり　しるすべきもの多し

其中の佳作を考へて出せり

著作堂一席話　近刻

曲亭馬琴翁七十余歳の長壽まして五十年来見聞せし奇談珍説をこ古今未聞の高論をど筋引くあつめ唯一席の物がたりとゝ雖ども面白くこれはでいづまの草紙ゆゑ仮ものゆゑ新奇妙談多し

いまでも売れ行よろしく名あり

著作堂の柏堂わく一席語を市

北越奇談　全六冊

越後雪譜　前後　全六冊

大の書の北越冬春のあひだ雪中の奇観をつゞるに成わつめ居るゆゑ霊山名所を視る誠にありがたき珍書なり

山東翁栢樹著

繪入讀本　田家茶話　全本五巻

大藏永常集

そもく山書は忠臣孝子義夫節婦の身の上を初として古今の奇談を数百ケ條あつめさうろうふるきものがたりのわるがるく只命屈小異見ゞまく眠気を催ふまを思ひ飽あて考まく文章とこゝろ安くかく試せ讀ん在るゝわれば実小田家の便言小論く聞やまを死とゝ一と子ども流小生ゝく分解べ両の見

ばまゝ〳〵そのゝ頭てきろせるの人その外のかりろ死ゆめでおのづゝ〳〵繰成すめてそまゝ〳〵と読を笑〳〵お仇のこゝ紙とまゝ小生〳〵るのへかゝきまゝべとて戯作のゝがゝりふわざれがゝれとゝのゝさゝるる世ゆに教訓となるゝのゝとゝ〳〵殊ゆ近年の実説人の見聞せゝまゝ〳〵ゝ平て考されゝゝまの席ゆて色の人世ゝ〳〵ゝゝゝ聴流ゆゝるとゝれ信せらまゝ〳〵茶のゝ色の上坐とるゝゝゆゝ〳〵車沈のまゝ落一坐をせゝゝ古々ゝゝませゝてその益まゝそ賊とまゝまゝ一因ゆ好まゝゝゆとゝ奇代の実録とゝゝ

高僧傳の類

釋尊御一代圖會

北齊老人為一画図

聖德太子傳圖會 六冊

日蓮聖人御一生記圖會 前後十二巻

本書は高祖大上人の御系圖を始め御一代の事跡を諸書によりて改正し御行状を図會よりハ一丹誠を加へ御堪難を目前に拜するがごとく古図をうつし丹誠を加へ宗祖の御傳世に多しとハいへどもこれハ法華宗旨の人々我慢の扁屈をすてことごとく信心のまことをもつて拜覧わべきものなり

喜多川寳雪画圖

繪本一休譚　前後十二卷

中將姫一代記　全五冊

熊谷蓮生一代記　全七冊

弘法大師御傳記　全五冊

圓光大師御傳記　全六冊

釋迦八相記　全五冊

日蓮上人御傳記　全五冊

親鸞上人繪詞傳　全三冊

西行法師一代記　全六冊

北四輩順拜圖繪　玉山筆　全十冊

諸大人隨筆之部

今昔物語　宇治大納言源隆國卿著

宇治拾遺物語

古今著聞集　全二十卷

集義和書　熊沢了海著

集義外書　同　著

駿臺雜話　鳩巣先生著　全五卷

西行撰集抄　全六卷

閑田耕筆　全五卷

閑田次筆　全五卷

開田文草

開田詠草

近世奇人傳　全五巻

續奇人傳　全五巻

爲人抄　全五冊

東遊記　橘南濱著　前後十巻

西遊記　同　著　前後十巻

北窓瑣談　同　作　前後八冊

筆花庵　新井白蛾作　全四巻

猿著聞集　八嶋定岡作　全四巻

新著聞集　全六巻

雲根志　木内小繁著　十二編揃十五巻

簑笠雨談　馬琴作　全三巻

近世奇跡考　京傳著　全五冊

燕石雜志　馬琴作　全六冊

骨董集　京傳作　前後六巻

三編より五編まで追刻出来

そもそも京傳先生ハ戯作者中興の元祖ゆゑ一代の著述ハ数多くこれあり其中に書ハ多く年来の隨筆ゆゑ好古の風雅奇妙談ゆゑ古の質素その時代を眼前ふるがごとし

芳窓漫録　全三冊

思齋漫録

橘菴漫筆　前後十巻

梅園雑話　合二巻二冊

尚古むさみ　全二冊

伊豆日記

七嶋日記

閑窓筆記　全二冊

俳家奇人譚　前後六冊

萍花漫録　全

擁書漫筆　高田友清著　全四巻

松の屋大人の隨筆はその風高く
ゆ俗の人遠き書ぶりなれども
よりくゝをもよむ材はすくゝ一際
なりろくなのびるる和学の道はい
いろの書とりのべし

棟梁集　同著　全二冊

相馬日記　同著　全四冊

冨士根元記　同著　全二冊

萍のゆく　全二冊

こゝ近江より東に旅寐せ博学
の阿闍梨が著しる隨筆ゆく
その文ぶりずいたのびるる風
調高きかもむき多くして隨筆の
るるふしていに第一なるべし

梧窓漫筆　前後四巻　太田錦城先生著

梧波教諭　前後四巻　同著

むぎとげし　瀬川如皐作　全二冊

花街漫録　全二冊

雑交記　馬琴著　全二冊

狂歌奇人譚　全六冊

廣益俗説辨　全北五冊

還魂紙料　柳亭種彦著　全二冊

玄同放言　前後六巻　曲亭大人著編　第三編出来

大きに名を世に先生の隨筆なるべし自然博覽の珍説多く和漢の先哲も解ざる書籍の注釈をなど丹誠有益のものなり多し一山書房紙くく請君いかく著作堂の号をさとし谷羽の[illegible]強記なるべし

近代世事談　全五冊

誹林沽涼著

大の書は東山殿よりこのかた呉服食菜草木器財近代船来の手暦其外書画詩哥連俳旋藝雑伎ホいろくすべ何いろのいろとしなくなくなく挙こと且ば机右に置て殊更に珍重の書なるべし

同二編　三編　各五冊ゝ　近刻

太平樂皇國性質　全二冊

木公亭金水著

大の書は儒者と佛者の説の異なるをもとを説はじめとして古今風俗の変化わるゝは神社は鄙口とりゆるを

誤まりとする説或は仏ぞんじ山
鯨まくら三味線琴の説豪富
貧士を侮る紀元夫婦喧嘩や囲
女あくび刺墨江戸の方言その
外挙てきべし何人ともなく
雅俗の外に説とつけて珍書を
むそまく書を用ひて教訓と
あるひも多くもあるべし求めて
視るべし

唐軍並諸記録

周武王軍談

全五巻

縮文畧解画鈔

殷の紂王位にのぼりてより悪行
をなし姫ふみを酒ふけれ想戸
といふ美人を寵愛して忠臣を殺
し聖人をとるもまたことふかく武王太
公望と謀つて天下のうれふ紂
王を征し終ふ殷の天子六代はいつ
年にして六百卒余年に亡び武王国を
おさめ周の代となり八百年の基を
ひらく是れより廿五代め周の景王
までのことなり

漢楚軍談

前後　全十巻

曲亭馬琴略文

周の代亡びて秦の始皇即位の後阿
房宮といふ廣大の玉殿を建三千

人の美女と日夜婬酒ほしいまゝにして悪人趙高を愛し儒者を穴ほうばめ書物を焼すその外種々の悪行ありしかゝるに秦の二世皇帝位を即てとゝろ不崩ぜ三世皇帝位を即て天下大いにみだれ六国の子孫おこりくゝ旗をあげ国を起さんとす山東の劉邦といふ人芒碭山の白蛇を切く衆人を従ゑ張良といふ軍法の奇師と味方をせしより頂羽と天下を争そ人終に頂羽を亡して漢家四百余年の基をひらくこゝを高祖皇帝といふ漢楚二十余年の争戦あるいとゝろ〳〵くきゝ〳〵あるを琴子の筆意をもて略文をのべくくたの本ちどうしゝあるを古今奇代の絵入の小傳袋入ゆえ倩もゆもく諸国のくゝろ家づとに品といふべし

葛飾戴斗画
次編追々出来

漢の高祖より二百年にして王莽といふ者国家を奪ひ一旦漢の世ほろびその比刘秀といふ人出て漢の世を再興ハて光武皇帝と称し亦二百年の基を行ひ起をこゝを東漢とゝなづく此後漢の十二代霊帝のとき政事乱れ黄巾の賊おこりて都を責んとゝそその頃都の董卓といふ者天子の内宦十常侍の悪人を殺して天下の権威をほしゐ〻ゝ天子ゆゑ大臣王允ハこれをうのき貂蟬とのの人美人をもつて董卓を亡ぼし世を治めんとするに其残党李傕郭汜再び王允を打く長安を乱そこの比曹操いそ〻も六軍をもとして長安を救ひ

献帝を守護するとなして恣に
権をふるふまゝ孫策と云人は周
瑜魯肅あるゝ名臣〻もろ〻
でゝ威をふるひて江南の地をひ〻き
まゝ劉備玄徳と云人は甚身いろ
て貧〻かろ〻ゝ関羽張飛と云豪
傑と桃園の義をむすび歎難辛
苦〻〻後荆州に名を上せるの物
ゞうその中の人関羽の英男夫人を
〻まみて五関やぶりの威風千里を
独歩〻まゝ玄徳は臥竜孔明を味
方にまきえと三度草庵をとゝ孔明は居る
雪風の寒きに〻いとゝび
ゞ〻天下の三分を定めてこれはまさ
ゞひ趙雲長坂坡に勇をふるひて
多勢主をまもるひ張飛が大音曹
操の百万騎を橋の上に叱り付て
支ちゝめ孔明呉の国ゝいとりて
大論〻はかふ周瑜と合体して
三江は大軍をとゝのへまきを連環のたち

アとゞめて曹操の舟ゝとなれざる
をゝめはたゞをもゝ孔明は七星壇に
東南の風をいのり八十三万の魏兵を
赤壁に焼ぬ〻関羽義にゝつく曹
操をとろさぬ孔明趙雲に錦嚢の
謀をさゝげて呉の国ゝ玄徳をすく
ひ周瑜をとゝ死せ〻めて四郡を暮
さもそもとゝ次第ゝ玄徳の勢ひ
盛になりて蜀の国をとりて位に
坐〻照烈皇帝と称ま東漢い
十四代百九十五年めゝ曹操の
子曹丕のゝあゝ
呉魏蜀の三国とゝ
威をわゝそひ上事
玄徳の仁政孔明の奇謀千載
ゝひはゝ人をもゝ天下乃
善悪ゝゝ頭明
繪本い前版のゝ
彫刻ゝつとも念入
ゝゝて珍重深〻べ〻

繪本西遊記　初編十卷
二編同
三編同
四編同

全本四十卷ゐて満尾

意馬心猿の説ゝくるとう説出ゝくる
奇代の独作三蔵法師孫行者ゐ
神猿さるとの外小八戒沙神の徒弟
を伴ひ西天へ経文を求めに赴くるに
山川万里の堪難辛苦異類異形の
妖魔を退治し孫呉空の神通力に
も及ばざる化物出く三蔵法師を
苦しめる節あるべ孫行者の神
通金斗雲とゐ雲にのって東
海ゐ行くう観世音菩薩むく西竜
をもとぶり種ゝの奇談珍説多く
数千里の山海を経て終に天竺に
いたり本意をとげるのゐ知る人
世一代の用心とえ教訓なり

水滸画傳　初編二編十卷
曲亭馬琴譯
葛飾北齋画

そもゝ水滸伝ハ小説中第一の判
りとゐいへども文章妙作なり
ゆえに馬琴先生の筆削せれ
くまゝ水滸伝注解和訳の中は
てゐの画本を第一とまべ

水滸画傳　三編五冊
高井蘭山補
北齋為一画

四編　五冊
五編　五冊
六編　五冊
七編　五冊

次ゝ刻して百回ことゝく
全本とあゝんとゐ看官も精
覧ゐく敷元小丹誠の功を遂
げまくとゐ

豊臣太閤朝鮮を征伐ありしに韃靼といふ鬼の国と
ところ大明国との韃靼とのあひだ
戦ひ北の方危く難渋なりしが其
後和朝の軍兵うちめぐりて三年過ぬ
大明つよく舌を萬暦帝酒色に溺
まして政事をうしなひ崇禎帝位を
さて国のうちも安きことなふ
於て李自成といふ者陝西の地にて乱を発ぬ
はるかに河東の地にて
宋孩子といふ軍士らく謀をなす
明軍をおそれ賊兵をおびたゞしく
ちく飢饉にあひむと称して官
米を出し諸国の飢をたすけ人ぬ
威をふるひ大軍をもつて都に
登り竟に天子を亡して李自成一
且国王となる大明といふ国は十七代
二百八十一年ゆゑ亡びうせぬれども

呉三桂といふる忠臣の大名韃靼の
軍勢をかりて李自王の賊兵をや
ぶり国の仇をはらすとの時韃靼の
大将明国の弊に乗じて明の都
をうばひとるそなたより明の子孫
弘光帝立て鄭芝龍といふ者を
大将とし清軍韃靼を破ることの
さらびくるうさまとの大明の代絶
期の定まりるるうけんとう清軍
きちく明帝始終今隆武
帝位を継ぐ
分一を保ちぐ
子鄭森といふ
まちくもりぐ
神ぶ
の血脈とて勇猛武略敵
ちく
て明の国風元ぬ
もるぬ

おごりて再度乱れ[illegible]
[illegible]の鄭森が国民の父[illegible]
称号をゑ[illegible]国性爺と称ひその
のち永曆帝をたり立て亟輝爺と
[illegible]豪傑[illegible]南洋嶋[illegible]
[illegible]安海城[illegible]泉[illegible]父
大功をなすことの明国の運気
[illegible]万事[illegible]任せむ大
[illegible]病死をえ
[illegible]清軍その地を責るこ
[illegible]三代目[illegible]
[illegible]和睦[illegible]
代[illegible]日本国へ加
勢をたひ[illegible]軍を催ス清兵と
唐土にあらそ[illegible]朝鮮正伐[illegible]
して和朝と地を[illegible]日本出せの国性
爺ともうもの[illegible]

美談ゆへ——

琉球軍記　全十巻

清俗奇聞　全六巻

大明国亡びのち當時の清朝の
風俗をつらつらかきもせ書けり

唐土名勝圖會　全六巻

漢朝へ[illegible]ようの[illegible]
地のことを眼前のごとし——

通俗俳聞録　前後十二巻

六樹園大入譯
[illegible]齋英泉画

唐土の公事明断奇談をあつめ
誠に珍説とゝの書あり

新田氏藏書記

繪入外題鑑 後編

讀本外題鑑 中本の部 一冊

近来児童婦女の愛翫する中形本の外題をとりあつめその本の中れとてわかり記しそのかたちの便とけうるべし人情のめづらしきを好むかたの便とするまた多くはかりそめに目を遮て忘れぬべしとも思ひしかれども其事を知りて求めるこの調法のこころぞ以前ふるきれくさの記憶となりぬるをたのみ侍べるなり中形本まれに著作して拾遺残編餘興のたぐひ残冊つづき何ぞ

わたびらの種本ともなりぬるかの前編後編

あるいはその数ぞ多くしてわがくらしとして本屋にて出定の部のたぐひとなりぬ

遠国他国の中方より販元へ用ひ作せ出ぬるこの見出し仕入の元の覚書のなかにとゝ着官ハいふ及ビ貴本貸本の中方ハいなんかゝハ仕懐中の小本ハ

寛政年中より天保のころまで江戸
戯作者画工の名目その大略をあらん

作者　山東菴京傳
、式亭三馬
、立川焉馬
、振鷺亭主人
、咸和亭鬼武
、十返舍一九
、小枝繁

右ところ〴〵故人となる

作者　曲亭馬琴
、爲永春水
、松亭金水
、墨川亭雪麿
、瀧亭鯉丈
、花笠文京
、文亭綾瑞
、山東京山
、柳亭種彦

右当時ところ〴〵流行の先生なり

この外二代目の人々まだ二三風のくりかし
大人まだ〳〵第の名目八後編ト人〳〵を
の末にところ〴〵出ル

浮世画師　歌川豊春
、歌川豊國
、歌川豊廣
、歌川國安
、歌川國丸
、歌川豊清
、柳川重信

右いづれも名人の画先生なれども
惜むべし故人となる事なり

浮世画師　葛飾為一老人
、歌川國貞
、蹄齋北馬
、二世柳川重信
、歌川國芳
、歌川國直
、溪齋英泉

此事の當時ハ流行の画大人

あり尤作者とかりそめ恵工の多きもの[illegible]
[illegible]
[illegible]
猶[illegible]の作者豊の名員[illegible]
小のこと[illegible]奉人[illegible]

[illegible]丹城の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

東都撰者
文溪堂
岡田琴秀著述

教訓亭
鴛鴦貞高補正

天保九戊戌年仲秋發行
江戸儒書

松亭主人金水浮書

全志發行書林

京都
山城屋佐兵衛
九屋善兵衛
大文字屋得五郎
本屋宗七

大阪
河内屋茂兵衛
河内屋長兵衛
河内屋太助
塩屋宇兵衛
伏見屋嘉兵衛
秋田屋市五郎
河内屋平七

江戸
岡田屋嘉七
泉屋市兵衛
小林新兵衛
丁子屋平兵衛